ヤツボシシロカミキリ、その後(3)

小西和夫 1)

はじめに

ヤツボシシロカミキリがツシマナナカマドの生葉に 集まり後食する実態を,2018年から3回にわたり本誌 で報告してきた.最初の報文では兎和野で初めて本種を 発見した樹を,枯死部にカミキリらしき羽脱孔が認めら れたこともあって、「発生木」と推定している.その後も, 毎年確実に成虫が得られるこの樹を指して「発生木」と 表現してきたが、本種が本当にこの樹に産卵し、幼虫が これを食樹として利用しているのかどうか、確認はでき ていなかった.

今回は「ツシマナナカマドからヤツボシシロカミキリを割り出し、確認されると最初の正確な記録となります」という、中村慎吾氏からの私信に後押しされて、経験は無かったが材採集を試みることにした.

ツシマナナカマド材(観察記)

2020年7月, 兎和野から伐採後1年未満の新鮮な ツシマナナカマドの枯枝(径3~5 cm, 長さ30~50 cm)を 14 本持ち帰った. 枯枝は 2020年に伐採された樹及 び風で幹から折れた樹の枝から採取した. 衣装ケースの 中央に乾燥を防ぐため水を含ませたフローラルフォーム を置き, 収納した枯枝は時折霧吹きで湿らせた(図1).

2020年8月下旬から夥しい量のフラスが見られ(図2),11月6日当該の材を割ると体長15~6mmほどのフトカミキリ亜科(ヒメヒゲナガカミキリ?)らしき幼

虫が現れた(図3-4). また2021年3月20日に少し 肌理の細かいフラスが出た材で、今度は体長13mmほどの幼虫が、芯に向けて穿たれた穴から顔を出した. 下口節の紋の形状がタカサゴシロカミキリに似ており、ヤツボシシロカミキリの幼虫と思われた(図5-6). しかし埋め戻した枝をケース内に混入し、後に複数種が羽脱したため特定はできなかった.

2021年4月15日以降,*ヒメヒゲナガカミキリ4exs.(以下「カミキリ」略)*ニセビロウド4exs.エゾサビ2exs.*セミスジコブヒゲ1ex.*シラホシ1ex.*キモン2exs.(図7)ドイ1ex.が羽脱した.*印は「日本産カミキリムシの食樹と生態」(中村,2019)にナナカマドを食樹とする旨の記載がない種である.

ヤツボシシロカミキリは5月22日を皮切りに7月19日まで18exsが羽脱した(図8-11). 羽脱孔は3mm径の真円(図12). 蛹室は芯に向けて穿たれ,内部は楕円形で中央部が膨れている(図14-15). 奥行きは17-18mm程で,内部に微細な木屑が見られる. 近縁のタカサゴシロカミキリと同じく,樹皮下を摂食(図13)した後に心材部を芯に向けて穿孔して蛹室を作るようである. 羽脱直後は体が柔らかく,触角も巻いている. 別の衣装ケースにバラ科の樹の生葉を入れて後食を観察し,但馬方面に出かける折に兎和野に寄って,枯枝の採取地に放した.

前回確認した公園のヒメリンゴ以外にハナカイドウ



図1 ツシマナナカマドの枯枝



図2 夥しいフラス (2020.8 月下旬)

¹⁾ Kazuo KONISHI 兵庫県西宮市





図 3, 図 4 フトカミキリ亜科 (ヒメヒゲナガカミキリ?) の幼虫 (2020.11.6)





図 5, 図 6 ヤツボシシロカミキリ?の幼虫 (2021.3.20)



図7 ツシマナナカマドより羽脱した キモンカミキリ (2021.5.13-14)

キモンカミキリはクルミ類をホストとしているが、「広島県のカミキリムシ」においてミズキから羽脱した個体を「ミズキキモンカミキリ (仮称) Mensia sp.1」として報告されており、本個体の斑紋や触角といった形態的特徴もその特徴に合致した。しかし、キモンカミキリは近似した不明な種群が知られており、今後検討を要するグループである(大林・新里、2007)とされていることからも、現時点での種名はキモンカミキリに留めておく。



図8 ヤツボシシロカミキリ(羽脱後の個体)

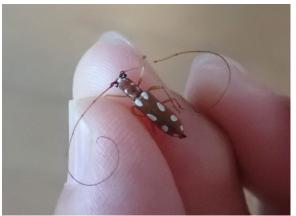


図9 ヤツボシシロカミキリ(羽脱直後の個体)



図 10 ヤツボシシロカミキリ (羽脱後の個体)



図 11 ヤツボシシロカミキリ (羽脱直後の個体)



図 12 ヤツボシシロカミキリ (羽脱孔)



図13 ヤツボシシロカミキリの摂食痕(樹皮下)



図 14, 図 15 ヤツボシシロカミキリの蛹室



図 16 ヒメリンゴ生葉 (後食)



図 17 ハナカイドウ生葉(後食)



図 18 ヤツボシシロカミキリの斑紋変異



図 19 ツシマナナカマド (枯枝や折れた幹が目立つ樹)



図 21 タカサゴシロカミキリ (兎和野 2021.6.24)



図 20 ツシマナナカマド (根元の枯枝)

(バラ科)の葉も食べた(図16-17). 飼育環境では何でも食べるのかとハナミズキ(ミズキ科)を与えてみたが、これには見向きもしなかった.

兎和野にて

2021年6月17日から7月21日まで兎和野を4回訪れたが、その度にいつもの「発生木」で本種が得られた。また今回初めて、300mほど離れた地点にある林縁の3本の樹でも、成虫を確認した。これらの樹々の生葉を掬うと毎回2~3頭の成虫が網に入る。いずれもひょろ長く伸びて枯枝が目立つ樹で、「発生木」と良く似た雰囲気である(図19)。周囲は10mほどの高木に囲まれており、光を求めて上へと枝葉を伸ばしているが、陽のささない枝は葉を落として立ち枯れている。また林縁にあって風の影響を受けやすいためか、幹が折れた跡も認められる。根元には「発生木」と同様、折れた幹のものと思われる枯枝もあった(図20)。

今季は材から羽脱した 18 頭を含めて多数の成虫を撮影できた. 斑紋等の変異の幅は小さいものの, 白紋の形状や地色 (褐色)の明暗などには個体間で差異が見られる (図 18).

6月24日に「発生木」で本種を確認した後,200m ほど離れたノグルミから,兎和野で初めてタカサゴシロ カミキリ1ex.を得た(図21).同時期,同所に生息す る近縁種間に食樹の違い以外の生殖的隔離はあるのだろうか.

御嶽遠征

2021年7月15日、ズミを食樹としている本種を観察するため、対馬と並び、以前から特産地として有名な開田高原へ向かった。ズミは葉の形に変異があり、慣れるまで車からの判別は難しかったが、標高1100~1300m付近の林内や林縁に点在している。1150m地点の別荘地の中を小川が流れ、その脇にあった高さ7~8mの樹の生葉でヤツボシシロカミキリ2exs.が得られた(図22-23)。数本が密集していて陽当たりの悪い交差部分には枯枝も認められる。

御嶽のナナカマドは亜高山帯の 1700m を超えた辺り から見られる.次の日には、田の原でナナカマドを掬ったが生葉からは何も得られず、終わりかけの花や足元のショウマ等から中部山岳地特有のピドニアが多数網に入った(図 24).

カミキリの聖地・御嶽への初めての遠征では、ズミに棲む妖精と共に、憧れのハイマツの乙女 (オトメクビアカハナカミキリ *Gaurotes otome* Ohbayashi, 1959) にも出会うことができた(図 25 - 26).



図 22 ヤツボシシロカミキリ (ズミの生葉 2021.7.15 開田高原)



図 23 ズミの樹 (2021.7.15 開田高原)



図 24 御嶽のピドニア (2021.7.16 田の原) 左からブービエヒメハナカミキリ (以下「ヒメハナカミキリ」略),シンシュウ,マツシタ,ニッコウ (亜種 ohbayashii),シナノ,と思われる.



図 25 オトメクビアカハナカミキリ (2021.7.16 田の原)



図 26 ハイマツの花 (2021.7.16 田の原)

おわりに

今回は新しい伐採枝から成虫を割り出し、兎和野のヤツボシシロカミキリの幼虫がツシマナナカマドを食樹として利用していることが確認できた。ただこれらの材は人為的に伐採、あるいは風倒木を処理して道端に積まれた枯枝であり、自然環境のなかでは例外的な状態である。

本種が後食に集まる樹に共通するのは、立ち枯れた枝や折れた幹が目立つことだった。かねて貧相な特定の樹の生葉に集まるのを不思議に思ってきたが、衰弱した樹の枯枝に産卵するためであるとすれば納得がいく。立ち枯れの枝に紐をかけ一部を折ってみたところ、本種のものと思われる3mm径の真円の脱出孔も確認された(図27).フトカミキリ亜科の成虫の多くは、幼虫期に食べた樹の生葉や樹皮を後食する。また狭食性のキボシカミキリ等では衰弱した寄主樹木が発する揮発物質に誘引されて成虫が集まるという。個体数の少ない種が産卵に適した枯枝のある樹に誘引され、共に生葉を後食して雌雄遭遇の機会が増すのは、効率的な繁殖のために有効だろう。

2018年に初めて本種と出会った「発生木」は、太い幹が割れてきており上部の枝もやがて枯れていくだろう(図 28).かつて幹の枯死部に認めた羽脱孔は本種のものでは無かったが、この樹の枯枝で発生を繰り返してきた可能性は高く、「発生木」との表現も誤りではなかったかもしれない。これまで本種を強く誘引してきたこの樹も、いずれ伐採される運命にあると思われる。しかし「発生木」以外にも、樹勢に翳りの見られるツシマナナカマドをより広い範囲で見つけることができた。バラの妖精たちがこれらの樹々に惹かれて集まり、生葉や枯枝で命を繋ぐ光景を思い浮かべて、安堵している。

謝辞

最後に、品切れだった「日本産カミキリムシの食樹 と生態」を譲っていただいた際、幼虫もツシマナナカマ



図 27 ツシマナナカマド (立枯の枝の羽脱孔)



図 28 幹が折れた「発生木」

ドを食樹として利用していることの確認が必要であると 指摘,背中を押していただいた中村慎吾氏に深い感謝と 敬意を表します.

参考文献

- 大林延夫・新里達也(編著), 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会. 818pp.
- 黒田祐一, 1950. タカサゴシロカミキリの幼虫・蛹及 び習性に就いて. 昆虫学評論, 5(1); 41-46.
- 中村慎吾, 1955. シロオビカミキリとタカサゴシロカミキリの幼虫と蛹について. ニュー・エントモロジスト, 4(1~2); 38-44.
- 中村慎吾, 2019. 日本産カミキリムシの食樹と生態. 比婆科学教育振興会. 393pp.
- 広島虫の会, 2018. 広島県のカミキリムシ. p132.
- 深谷緑, 2015. キボシカミキリの配偶行動と生態情報利用, 体サイズ. カミキリムシの生態. 北隆館. p157-185.